



市民音楽祭 新潟中央短期大学のリズム体操（11月6日）
 幼児教育科1年生の音楽に合わせた舞台いっぱいの笑顔と元気

救命救急センターを
 加茂病院に誘致する
 署名運動を行っています。

主な内容

- 救命救急センターを加茂病院に併設することを求める署名運動が始まりました 28
- 第44回 市展開催 915
- 秋の叙勲 1617
- 第8回 加茂菊花展 18
- カメラスケッチ・総体の結果 19
- 加茂の風土記 20

市政報告

加茂市長 小池清彦

人科は言うに及ばず、脳外科、循環器科、小児科等ほとんどあらゆる科を持った病院が加茂市に出現するのではありません。

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める署名運動が始まりました。

加茂病院は、三百床なら医師数約五十人、五百床なら医師数約八十人の大病院となります。

私が見るところ、今や候補地は、二か所にしぼられているのであり、加茂病院は、その一つであります。

もしも、加茂病院に救命救急センターを持つてくることに失敗して、

救命救急センターが加茂病院に併設されれば、加茂市民待望の産婦

は、病院再編の対象として、廃止さ

れる可能性が大きいと思われれます。

即ち、加茂病院は、今や、繁栄か滅亡か、生か死かの関頭に立たされているのであります。

平成十年の加茂病院戦争のときは、加茂市民の九六・五%の方が署名され、勝利することができました！

市民の皆様！

みなで、署名の力で、

加茂病院に救命救急センターを

持つてくるため、頑張りましょう！

次に、あらためてこのたびの署名

運動の関係書類を掲載いたします。

5ページの署名用紙に署名される方は、次の宛先まで、御郵送くださいますよう、お願い申し上げます。

〒959-1392

加茂市幸町二丁目三番五号

加茂市役所総務課気付

加茂市区長会

加茂市民の皆様へ

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める
御署名のお願い

去る平成二十三年二月十八日の合同会議（神保副知事、県央の各市町村長、各医師会長、各救急病院長が出席）において、共通認識が合意され、救命救急センターと併設病院の問題は、大詰めに迎えることとなりました。

つきましては、このたび差し上げました内容の要望書に署名簿を添えて泉田知事及び村松県議会議長に提出したいと存じます。

市民の皆様には、ぜひとも、この署名運動に御参加下さいまして、このたび各戸に差し上げました署名簿の用紙に御家族全員の御署名（やむを得ない場合は代筆も可）をお願い申し上げます。

平成二十三年十一月十日

加茂市長	小池清彦
加茂市副市長	後藤信夫
加茂市議会議長	五藤鉄治
加茂市議会議長	鶴巻忠継
同	皆川輝一
同	更科正國

加茂市民各位様

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める署名

住
所

氏
名

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める署名

住所										氏名									

きりとりせん

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める要望書

県央医療圏に建設する救命救急センターにつきましては、平成二十三年二月十八日の合同会議（神保副知事、県央の各市町村長、三市医師会長、各救急病院長が出席）において、共通認識が合意され、

- (一) 県央医療圏には、救命救急センターが必要であること。
 - (二) この救命救急センターは、「地域救命救急センター」であること。
 - (三) この救命救急センターは、「病院併設型」とすること。
 - (四) 規模は、「地域救命救急センター」で最多病床の十九床を基本とすること。
 - (五) 医師数は三十二名とし、その内訳は、救命救急センター専従医五名、麻酔科医四名、併設病院の専門の医師二十三名であること。
 - (六) 併設病院の規模等の判断は県に一任することとし、県は、専門的医療の提供や医師確保などの観点も踏まえつつ、五百床規模の実現に向けて努力するとともに、加茂市長の提案も含め、柔軟かつ現実的に検討すること。
 - (七) 県は、重要な案件について、「あり方検討会議（知事、担当副知事、県央の各市町村長により構成）」に相談するとともに、検討の状況等を随時関係市町村長、医療関係者等に報告すること。
- ここで、「加茂市長の提案」とは、加茂病院、燕労災病院、吉田病院、厚生連三条総合病院又は三之町病院を三百床から五百床の病院として、そこに十九床の救命救急センターを設置することを具体的に提案したものであります。
- つきましては、私達は、ここに、貴台に対し、三条市との境界に限りなく近い加茂市下条の地に、県立加茂病院を移転改築して三百床乃至五百床の病院とし、そこに救命救急センターを併設されますことを、最良の案として、御要望申し上げます。
- この場合、三百床でも十分機能すると考えますが、病院の再編を行うことなく、五百床の加茂病院とされますことを最高の案として御要望申し上げます。
- その理由は、次のとおりであります。
- (一) 県立加茂病院は、現在建て替えの時期に来ており、建て替えに合わせて、移転改築すれば、極めて経費の節約になること。
 - (二) 必要な広さの土地は、すべて加茂市が無償で提供するので、県の支出は、大幅に少なくてすむこと。
 - (三) 加茂病院に救命救急センターを併設する以外の案は、それぞれ困難な問題をかかえており、加茂病院に併設すれば容易かつ円滑に事業を達成することができること。

(四) 救命救急センターは、県立病院に置くのが最適であり、県央の二つの県立病院にあっては、加茂病院に置く方が遙かに地の利を得ていること。

(五) この場所は、県央各地から救急車で概ね三十分以内で到達できる県央の中心的な場所であること。

(六) この場所は、建設中の国道四〇三号バイパスに接する好位置にあること。従って、救急車による搬送にも至便であり、医師や職員の通勤と患者の通院に極めて便利であること。

(七) 加茂市は、すでにこの場所に、三町歩の土地を取得しており、そのほかにさらに一町二反の土地を確保しているところであり、さらに合計五町歩でも、六町歩でも、十町歩でもいくらかでも土地を取得することが容易であること。従って、三百床でも五百床でも、病床数を自由に決めることができ、それに合わせていくらかでも容易に土地を取得することができること。

次に、併設病院を五百床にするために、「役割分担の再構築」と称して、県央の病院の再編を行おうとする考え方については、県知事の権限は民間病院には及びませんので、結局県立の加茂病院と吉田病院の縮小や廃止につながるようになります。従って、私達は、県央の病院の再編即ち、病院の廃止・縮小・統合には、断固として反対するものであります。

「県央の病院の再編」即ち病院の廃止・縮小・統合という、厚生労働省の方針にもない実現不可能な問題を議論し続けて、いたずらに救命救急センターの建設を先延ばしにすることは、ただちにやめて、早急に県央医療圏の救命救急センターを建設されますことを強く要望するものであります。以上、私達は、県央地域の住民各位のお幸せのために、人の署名を以って、衷心より御要望申し上げます。

平成二十三年 月 日

県央医療圏の救命救急センターを加茂病院に併設することを求める加茂市民一同

代表

加茂市長
加茂市副会長
加茂市副会長

同 同 同

小池清彦
後藤信夫
五十嵐鉄治
鶴巻忠継
皆川輝一
更科正國

新潟県知事 泉田裕彦様
新潟県議会議長 村松二郎様

第44回 市展

市展賞受賞作品紙上紹介



日本画 「収穫」
萱森 玲子 さん



書道 「杜甫詩」 鶴巻 美雪 さん



洋画 「CATS」
滝沢 良子 さん

工芸

「秋涼」
塩野 明美 さん



彫刻

「浜辺」
川口 清作 さん



写真

「孫の書き初め」
鈴木 敏夫 さん



第44回市展
新潟日報美術振興賞受賞作品

日本画「開山堂蛙股」

高野 廣さん



書道「五言二句」 大桃 伊志さん



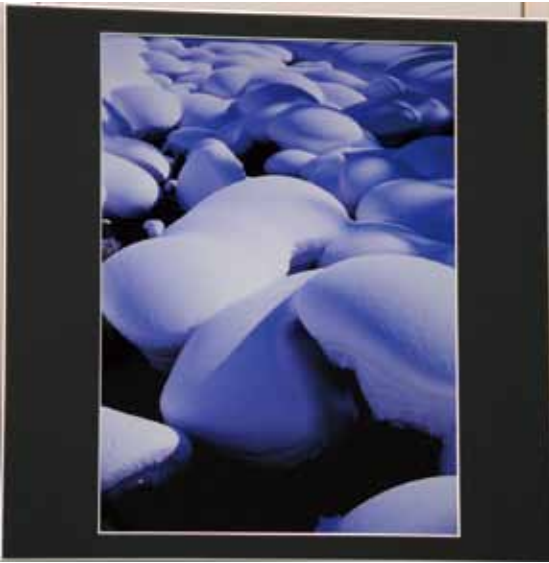
洋画「闘牛(待機)図」 桑原 茂さん

写真「優美」 新井 勝義さん



工芸「(革染)とどけ…メッセージ」
小川 千恵さん

第44回市展 奨励賞受賞作品



写真「深雪の溪流」
安中 栄五郎 さん



洋画「「それでね、」
吉田 如菜 さん

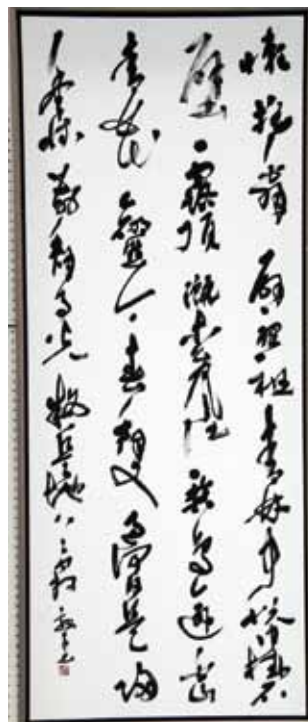


洋画「静物」 山際 正夫 さん

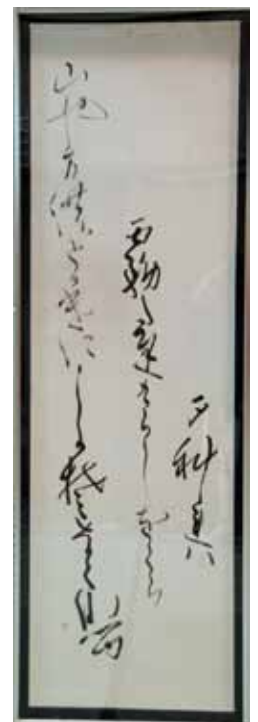
写真「エイリアン」
三浦 二郎 さん



書道「李白の詩」 河内 敦子 さん

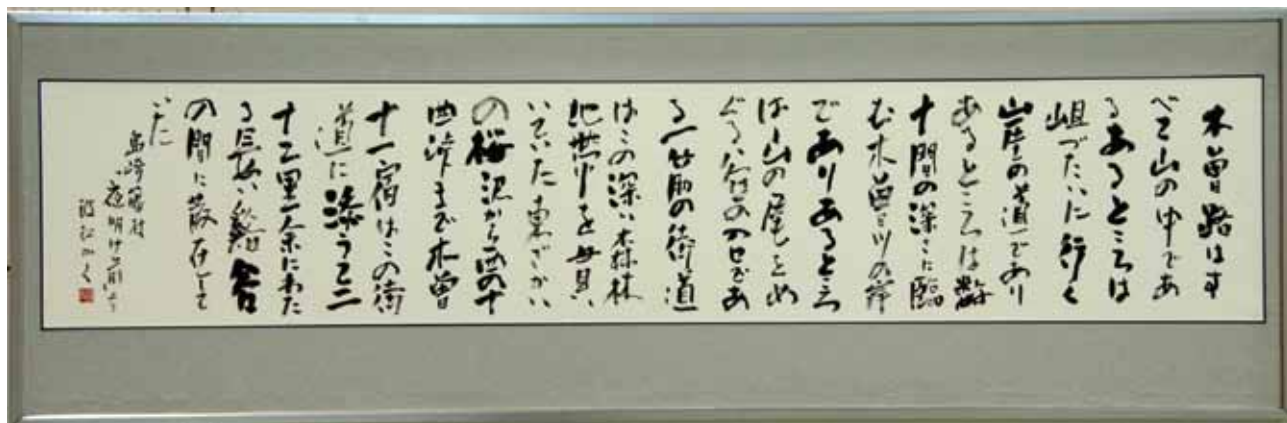


書道「七言絶句三首」 小柳 美月 さん



書道「実朝の歌」 大橋 香汀 さん

第44回市展 奨励賞受賞作品



書道「島崎藤村『夜明け前』より」 藤井 波江 さん



日本画「紫式部」 中野 千佳子 さん



工芸「線紋花器」 齋藤 ツヤさん



書道「黄遵憲詩」 馬場 範子 さん



写真「わんぱく鉄道」 小柳 典子 さん

第44回市展 奨励賞受賞作品

工芸「不動明王座像」
清水 重作 さん



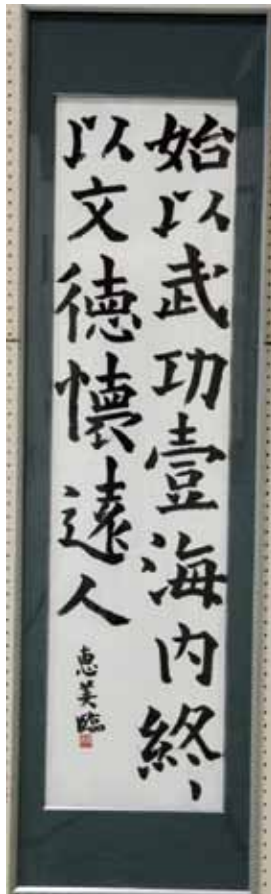
写真「フィナーレ」 手塚 昭子 さん

第44回市展
奨励賞受賞作品
(高校生の作品)

洋画「雨あがり」
大湊 風花 さん



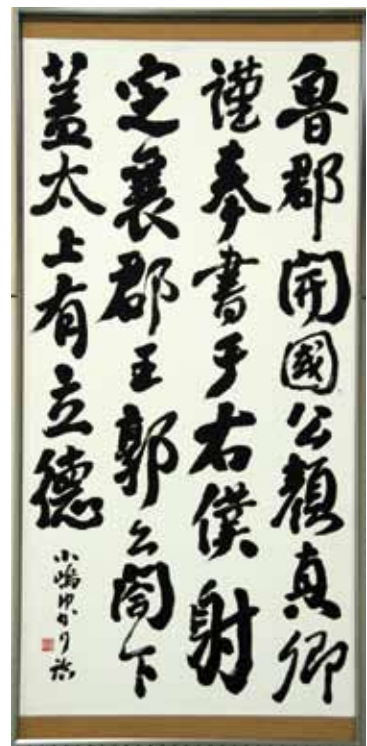
書道「臨九成宮醴泉銘」 西村 恵美 さん



使持節司空公長
樂王丘穆陵亮

書道「臨牛欄造象記」 川口 茜 さん

書道「臨『争座位文稿』」 小嶋 ゆかり さん



第四十四回市展の各部門で市展賞を受賞された皆さんから、受賞された感想や作品についてのコメントをいただきましたのでご紹介します。

日本画

「収穫」

萱森玲子さん(柳町二)

「はい、おみやげ!!」と娘が大きな白菜、キャベツ、赤かぶの根っ子を持って来てくれた。赤かぶの根っ子がいろんな方向に伸びているのが面白く、食べる前にスケッチをした。市展には、このスケッチをもとに沢山の子と根をつけた里芋の株を組み合わせて描こうと思った。

私のアトリエは台所。朝食の準備、後始末、掃除洗濯、花の水やりをした後、絵の道具を運び準備。電話や来訪者があると中断、絵筆のニカワが固まる。やっと集中し始めると、もう十一時、大急ぎで道具を片づけ、テーブルをきれいにして昼食作り。食事の後始末をして、また道具を運び、準備をして作業開始。絵はなかなか進まない。こんな取り組みだけど、水場がある台所が一番便利。

昨年、浦上先生に「きれいなだ

けではダメだ。何に感動し、驚き、何を表現しようとしたのか、見る人に伝わるものがなければダメだ。」と言われた。今年は、芽や根、葉の動きなどを描きたいと思ったのだが、伝わっただろうか。

洋画

「CATS」

滝沢良子さん(学校町)

今年は、東北大震災などつらいニュースの多い中、私の絵が市展賞に選ばれました。という嬉しい連絡をいただき、「エ、ウソ、本当」と何回も聞き返し、すぐには信じられませんでした。

今まで、キャベツ、TAMAGOを描いてきましたが、もうそろそろ違うモチーフに変えようと思いい、昨年猫のかわいらしさ、動きなど描けたらいいなあと思いい、描いていました。

しかし、猫の動きなど難しく、描いては消し、描いては消しのくり返しでした。が、おもしろく、

かわいい絵が描けたように思います。

このような大きな賞をいただいたのも、多くの方々のご指導によるものと心から感謝申し上げます。これからも楽しみながら絵を続けていきたいと思いいます。ありがとうございました。

彫刻

「浜辺」

川口清作さん(陣ヶ峰)

平成九年第三十回市展にて木彫で特別賞を受賞しその後石膏にも挑戦暫くは石膏の面白さを楽しみました。石膏像で市展賞と成ったその時に出会ったテラコッタで今度此れで市展賞と思ったのですが思い虚しく、又木彫に再挑戦し念願の市展賞にたどり着きました。石膏であれテラコッタであれ共に何を表現したいのかに不足があつて受賞の機会が有りませんでした。色々各展を観て気付きました。力点を何処に置かか作品を観ていただいた方々に理解していただけたか一人でも良いから理解できる作品を此れからも追求して行きたいと思いいます。作品は初めての海水

新潟日報美術振興賞

【日本画】「開山堂蛙股」高野廣(上条)

【洋画】「闘牛(待機)図」桑原茂(幸町1)

【工芸】「(皮染)とどけ…メッセージ」

小川千恵(幸町2)

【書道】「五言二句」大桃伊志(大郷町2)

【写真】「優美」新井勝義(都ヶ丘)



浴で海に向かうところですが、今回過分のお褒めを頂きました。感謝申し上げます。

工 芸

「秋涼」

塩野明美さん(第二十四区)

この度は、栄えある市展賞をいただき、誠に身に余る思いです。

また、陶芸との出会い、ご指導を賜りました先生、制作できる環境を与えてくれる家族、温かい言葉で励ましてくれた友人に心から感謝しています。ありがとうございました。

受賞作品「秋涼」は、夏の夜に響く花火の音が遠ざかり、涼風に秋の気配がして、物寂しく思う感情を流線で表現しました。

線の構成は、これからの課題になりましたが、全体のフォルムは、優しさとやわらかさを表現するため、土を工夫して、少しずつ積み



上げた成果が重量感もある作品に仕上がりました。

今後は、この感激を胸に刻みまして、温もりのある花器を作り続けたいと思っています。なごみ窯の皆様、これからもよろしくお願ひします。

書 道

「杜甫詩」

鶴巻美雪さん(三条市)

このたびは、市展賞をいただき、これまでの人生で賞には無縁の私には、喜びと、戸惑いと、感謝の気持ちでいっぱいです。

毎年、出展準備の時期と農作業の忙しい時期が重なり、出展を思ひ悩むのですが、いつも何も言わない主人が、今年は「俺が生きている間に、賞が貰えるといいなあ」と言う一言が頭の片隅にあり、ぎりぎりになりましたが出展することができました。

これも中山先生のご指導の賜と感謝しております。

これからも、楽しみながら、こつこつと頑張っていきたいと思ひます。

本当にありがとうございました。

写 真

「孫の書き初め」

鈴木敏夫さん(阜田)

この度は、身に余る賞をいただきまして、誠に恐縮致してゐる次第です。

定年後、始めたデジタルカメラは、はじめは遊び半分、ヒマつぶしのようなものでしたが、いろんな方々と知り合いになるにつけ、今は家内にボヤかれる位はまっている次第です。

平素は妻と二人ですが、正月とお盆は孫達に囲まれ、大騒ぎ。家内の号令で書き初め的一幕、てんやわんやの大騒ぎの中、記念にとシャッターを切ったのが孫の一枚でした。

今日、賞をいただいたことは、ひとえに友人はじめ先生方のアドバイスのおかげであろうかと思っております。

これからも一層精進してまいりたいと思っておりますので、どうぞ指導いただきますようお願い申し上げます。ありがとうございます。

奨励賞・振興賞の皆さん

奨励賞：日本画 「紫式部」中野千佳子(寿町)

【洋画】「静物」山際正夫(小橋1)、「『それでね、』」吉田如菜(秋房)

【工芸】「線紋花器」齋藤ツヤ(青海町1)、「不動明王座像」清水重作(後須田第3)

【書道】「李白の詩」河内敦子(新町2)、「黄遵憲詩」馬場範子(番田)、「島崎藤村『夜明け前』より」藤井波江(栄町)、「実朝の歌」大橋香汀(黒水東)、「七言絶句三首」小柳美月(下興屋向)

【写真】「深雪の溪流」安中栄五郎(上下条)、「わんぱく鉄道」小柳典子(八幡3)、「フィナーレ」手塚昭子(穀町)、「エイリアン」三浦二郎(五番町)

振興賞：【洋画】「雨あがり」大湊風花(加茂高)

【書道】「臨『争座位文稿』」小嶋ゆかり(新津南高)、「臨九成宮醴泉銘」西村恵美(加茂高)、「臨牛樞造像記」川口茜(加茂高)

秋の叙勲

公共のために尽くされたとして、秋の叙勲・褒章において加茂市から三名の方と一団体が受章の榮譽に輝きました。その足跡や喜びの声をうかがいました。

瑞宝双光章

(税務行政事務功労)



藤田 郁 男 さん
(柳町 2・70歳)

受章の感想を「大勢がかかわるこの仕事に対していただいたのかな」と、はじめに話す藤田さん。水戸税務署長で退職されましたが、最初の勤務は新津税務署だったそうです。県内には十一年勤務し、昭和四十六年に東京の国税局に移動。その後、退職まで東京、埼玉、茨城など関東圏内での勤務ばかりでした。

どのようなお仕事でしたかとお聞きすると、「税務署といっても

税金に関することだけでなく、一般的な事務仕事から職員の健康管理などたくさんあります。でも、特に記憶に残るのは調査や査察部門での経験でした」と話されます。査察部門は、映画で流行語にもなった「マルサ」の仕事で「映画をイメージしまいがちですが」と区切ってから、「実際にはもっと地味で細かな計算の積み重ねなんですよ」とのことです。

転勤も仕事の内だった中で、単身赴任をしないで、一緒につき合ってくれた奥様に「一番感謝しています」とも。

趣味はウォーキング。埼玉県内に住んでいたことから、秩父三十回所巡りを始めたのがきっかけだそうで、ふるさとに帰ってきて、加茂山、加茂川と四季の変化を感じるコースが大好きと話していただきました。

瑞宝双光章

(消防功労)



馬場 誠 作 さん
(岡ノ町・67歳)

馬場さんは、昭和三十九年一月に加茂市消防本部消防署に入庁し、四十二年間にわたり、火災、災害現場と消防行政に尽くされました。受章について「私一人のできることはなく、先輩方の経験と知識、同僚や消防団、地域の皆さんの協力があればこそやれたことばかりでした」と感想を話されます。

思い出される現場としては、昭和四十四年の大水害で、加茂川の増水で車が使えない中、自衛隊といっしょに市街地から水源地まで徒歩で被害状況を確認したことなど。また、昭和四十七年に、全国の消防署にはなかった救助隊を

創るため、救助技術指導者講習を受講しました。内容は、仙台市の陸上自衛隊レンジャー部隊訓練で、災害現場での安全確保や負傷者の救出・搬送方法などで、体力的にかなり厳しい訓練でした。その指導者講習後、加茂消防署に救助隊創設と発展に尽くされました。退職後も、サイレンを聞くとその方向に意識が向きがちになりますが、火災予防と交通安全をこれからも確かめていきたいと話していただきました。



瑞宝单光章

(消防功劳)



川崎 勇さん
(五番町・71歳)

「そんなに長かったのだろうか。一緒にやっていた人も大勢いるのに」と受章の感想を話す川崎さん。消防団に誘われたのは「車やトラックの運転ができるから」というのも理由の一つですが、「自分ができることであればやりましょう」というのが当たり前だったような感じでした。

火災発生時には必ず出動する第一出動の分団だったので、仕事で外に出るときは「だいじょうぶかな」と思うことばかりでした。「当時は火事が多かったのでしょうね」という川崎さん。火災発生件数が減った現在を「住宅資材や機械に新しい技術が使われていることと、消防署・消防団の予防活動」と考えます。火災・災害現場でのけがはしなかったが「どの現

場も悲しくなる」といい、山火事では水源が無いため、下草をたたくて消しても、振り向くとまた火が立って「怖い」思いをしたこともあるそうです。

二十四時間、火災があれば出動という生活は、家族の協力がなくては続けられませんでしたので、まずはそこに感謝したいということです。

趣味はへら鮎釣り。時間があれば下条川ダムで楽しんでいきます。以前、山形県へ釣りに行ったとき、地元の人が下条川ダムや自然学習館をよく知っていて驚いたことがあったと話していただきました。



緑綬褒状

(社会奉仕活動功績)

加茂ともしびの会

加茂ともしびの会(会長 鎌田勝七さん)は、三十年以上にわたり、加茂市と田上町の視覚障害者へ広報紙や新聞記事などの点訳・音訳する奉仕団体として活動されています。

点字は、縦三個・横二個の計六つの点の凸で文字を表現しますが、当初は点字板を使って、点一つづつを、厚紙にピンを押し当てて訳していきました。点字タイプライターを導入してから、一度に一文

字分の点字が打てるようになりました。このタイプライターは高価で、パソコンと点字プリンターで「印刷」できるようになった今も、大切にしているそうです。音訳は、この広報かもやお知らせ版、市議会だより、社協だよりなどの広報紙やエッセイ、時事のコラムなどをCDなどに録音しています。最近では、対面朗読の依頼や集まっていたいただいた方を前で朗読する「きずな読書会」という活動もされています。



点字



音訳

点訳と音訳のそれぞれの持ち味を出版物の種類に生かし、利用者へ提供することとしています。困ることは、地名や人名が読めないことだそうです。「間違った情報を届けてはいけない」という気持ちで「いっしょうけんめい調べますけどね」ということです。会員の皆さんは、社会福祉協議会の「点字・音訳講習会」を受講してみたいという方が多いようで、「特に必要な技術があるわけではないですからね」と会員のみなさんからお聞きしました。

第8回加茂菊花展

8部門百七十九点を展示

今年も夏の猛暑で、観賞用の菊の育成には苦勞されたとお聞きします。菊愛好家の皆さんが丹精込めて育てられた百七十九点の作品が、十一月六日から二十三日まで、冬鳥越スキーガーデン特設会場に展示されました。会場にひろがる菊の香りと色鮮やかなものから大輪、数多く花をつける懸崖など、訪れる人々を大いに楽しませてくれます。

総合賞および各部門ごとの入賞された皆さんは次のとおりです。
(敬称略)

【総合賞】市長賞「七幹立・清見のかすみ」石倉広茂(新潟市) 二等賞「懸崖・笹ノ雪」大竹与市(新潟市) 三等賞「厚物三幹・太平の銀峰」桜井美千代(新潟市)

【部門賞】

【管物三幹】優秀賞・高橋輝繼(新潟) 一位・関川勝(下鶴森) 二位・牛田豊作(田上町) 三位・大竹与市(新潟市)、安中朝次(上町)

【厚物三幹】優秀賞・桜井美千代(新潟市) 一位・近藤謹市(新潟市) 二位・近藤謹市 三位・桜井美千代、牛田勝(田上町)、近藤謹市

【懸崖】優秀賞・大竹与市 一位・小野福四郎(中鶴森) 二位・桜井美千代【七幹立】優秀賞・石倉広茂(新潟市) 一位・牛田豊作

二位・石倉広茂【中菊】優秀賞・石倉広茂 一位・大竹与市 二位・安中朝次 三位・牛田勝【だるま・福助・切花】優秀賞・大竹与市 一位・高橋輝繼 二位・大竹与市 三位・近藤謹市、牛田豊作、大竹与市

【木付け】優秀賞・清水修(上下条) 二位・一位・清水清松(上下条) 二位・涌井秀一(上下条) 三位・清水修

市長賞「清見のかすみ」(七幹立・石倉広茂さん)



市長賞「清見のかすみ」
(七幹立・石倉広茂さん)



二等賞「笹ノ雪」
(懸崖・大竹与市さん)



三等賞「太平の銀峰」
(厚物三幹・桜井美千代さん)



来場者を楽しませてくれる色とりどりの大輪の菊

カメラ スケッチ



小京都加茂秋物語2011 (11月11~13日)

市民体育館ステージ前では、ジャズの生演奏を聴きながら、加茂のおすすめ料理を楽しむことができました。また、公民館研修室での橋本龍美画伯と故・番場春雄画伯の作品展もおおぜいの皆さんからお越しいただきました。

世界の料理パーティー (11月19日)

加茂市国際交流協会が産業センターで開催したパーティーには、7カ国10種類の料理が並びました。料理を準備したボランティアの皆さんには、作り方や味付けの秘訣を聞く話で盛り上がっていました。



総体結果



太極拳

期 日 十月三十日
会 場 下条体育センター
※太極拳は講習会形式で七十名の参加がありました。



駅伝競走

期 日 十一月三日
会 場 陸上競技場周辺周回コース



バレーボール

期 日 十一月十二日
会 場 勤労者体育センター
【中学生(女子)の部】
優勝 葵中学校
二位 田上中学校
秒大会新②田上中学校 A 38分24秒
大会新③七谷中学校特設チーム
▼一般高校男子の部①おやじ選抜44分26秒②アラリヤ③コッシーズ (元GTR)



バスケットボール

期 日 十一月二十七日
会 場 加茂中学校、勤労者体育センター
【中学生男子の部】
①若宮中学校3年②葵中学校B(3年)③葵中学校A(1・2年)、加茂中学校3年生

【高校一般男子の部】

①俺達②ホーブルズ③F・D・K A M O、G O L D

【5区間11kmコース】

▼小学生男子の部①K F C 45分23秒②ジュニア陸上A③ドッジボー
ル少年団H I R O ▼小学生女子の部①ジュニア陸上女子A 49分34秒
大会新②須田ガールズファイブ2011③ジュニア陸上女子B ▼中学生男子の部①若宮中学校38分22

【3区間6・6kmコース】

▼中学生女子の部①若宮中学校A 26分19秒大会新②田上中学校A 26分25秒大会新③若宮中学校B 26分59秒大会新④加茂中学校B 27分17秒大会新

石川遺跡出土の謎の土師器 はじき

民俗資料館考古展示室から(六)

「それ」がなければごく普通の古式土師器の壺である。土器の時代は器形から概ね四世紀頃の古墳時代前期後半頃と考えられる。「それ」と

は、土器の表面に細い棒状の工具で刻まれた二つの線刻画のことである。旧版『加茂市史(上巻)』によれば、この土器は、戦後の土地改良工

事中に地下約七〇cmの地層から出土し、当時中学生が工事現場より発見し、複数の人の手を経ながら図書館に寄贈されたとしている。出土地は

石川小学校近くの水田と見られるが、詳しい地点はわからない。しかし、加茂市役所周辺の水田部からは古墳

時代前期の遺跡が多く確認されており、石川の地に古墳期の遺跡が存在した蓋然性は高い。

当時から「ナゾの土師器」として取り上げられ、昭和四十九年五月十日の朝日新聞に記事が見られ

る。その際に考古学会の中央の先生方の閲覧に供され、古墳時代の土器としてお墨付きを頂いていたようである。

二つの線刻画は線画の感じから土器が焼き上がった後に刻まれたと見られる。土器の中央部から向かって右側には縦二・六cm×一・六cmの幅

の中に弓矢を持つ人物が描かれる。左側には縦二・〇cm×二・四cmの幅の中に十本の線で、何かが描かれている。高倉などの意見や右側の絵とセットで考えるならば、弓矢で射る対象物、具体的には動物などであったという推測も成り立つがはっきりとしない。

絵画風の線刻は日本では旧石器時代や縄文時代の遺物にすで見られるが、弥生時代の銅鐸や近畿地方の土器に多く見られるものである。古墳時代の類例も少量ではあるが、存在する。県内では新潟市北区(旧豊栄市)の葛塚遺跡出土の鳥装人物画

が有名である。石川遺跡の出土品は間違いなく古墳時代前期の土器である。しかし、出土状況や一緒に出土した土器が不明であること、焼成後の線刻の風化度合いなどや類例に乏しいことなどから、線刻については後世の贋作ではないかとの見方もあり、慎重に扱う必要がある。今後古墳時代の線刻画の類例に注視する必要がある。

見学の際には意識しながら観察しないと見過ごすこともあるので注意しながらご覧頂きたい。

(伊藤秀和)

加茂の風土記



石川遺跡

石川遺跡出土の土師器壺



社会福祉費寄付金

▼高橋義和さん(陣ヶ峰)から五十万円

▼笠原昌枝さん(芝野)から三万円

ふるさと寄付金

▼笠原順一さん(東京都)から三十万円

加茂市へ
▼金子健太郎さん(燕市)から子供用食器千二百九十八枚

人口のうごき

11月1日現在
世帯 10,194 (-2)
人口 30,337 (-30)
男 14,648 (-13)
女 15,689 (-17)
()内は前月比
(10月異動分)
出生 15 (男11女4)
死亡 45 (男23女22)
転出 29 転入 29